

「使徒たち、奇跡を行う」

2016年03月18日

使徒言行録5章12節～16節。使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議な業とが民衆の間で行われた。一同は心を一つにしてソロモンの回廊に集まっていたが、ほかの者はだれ一人、あえて仲間に加わろうとはしなかった。しかし、民衆は彼らを称賛していた。そして、多くの男女が主を信じ、その数はますます増えていった。人々は病人を大通りに運び出し、担架や床に寝かせた。ペトロが通りかかるとき、せめてその影だけでも病人のだれかにかかるようにした。また、エルサレム付近の町からも、群衆が病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れて集まって来たが、一人残らずいやしてもらった。

マルコ福音書は、主イエスを埋葬した墓に行ったマグダラのマリアら女性たちに白い長い衣を着た若者（天使）が「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかる』」と告げ、復活した主イエスにはガリラヤで会うことができると書いている。このガリラヤはガリラヤという特定の地方を指しているのではなく、主イエスが最初に宣教した「神の国」という意味である。「神の国」は苦難を強いられている人々を生きることに向かって立ち上がらせる愛と真実に満ちた場、「ガリラヤの春」と言われる所であった。ガリラヤとは愛と真実が息づく生活の「場」である。

聖霊降臨によって誕生したエルサレム教会はナザレのイエスをキリストと信じる群れであり、言葉と心が通じ合い、愛と真実が息づくガリラヤであった。財産を共有し、必要に応じて分かち、互いの愛を交わし合った。彼らは、復活した主イエスはここにおられると実感し、エルサレム教会はまさに「ガリラヤの春」の再来であった。

彼らは心を一つにしてエルサレム神殿のソロモンの回廊に集まり、主イエスは復活したと力強く証した。ソロモンの回廊は宗教談義をし、自分の信仰を自由に発露できる場所であった。エルサレム教会は全く新しい宗教団体ではなく、ユダヤ教の中に位置する一団体であった。神殿の境内を宣教地としている。彼らの復活宣教に対し「ほかの者はだれ一人、あえて仲間に加わろうとはしなかった」と書かれている。「ほかの者」とは復活を否定するサドカイ派の人々のことであろう。彼らは使徒たちの宣教に心を閉ざし、受け入れようとはしなかった。当然であろう。一方、民衆はエルサレム教会の愛に生きる群れを賞賛し、主イエスを信じ、多くの男女が仲間に加わっていった。

使徒たちは多くのしるしと不思議な業を行った。人々は病人を大通りに運び出し、担架や床に寝かせ、癒しを求めた。ペトロが通りかかるとき、せめてその影だけでも病人のだれかにかかるようにした。共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）は、出血の止まらない女性が後ろからそっと主イエスの服に触れた時、癒されたというドラマチックな奇跡を伝えているが、使徒言行録の著者は、ペトロの影がかかった者は癒されたと書いている。ペトロの使徒としての権威を伝えようとしている。使徒たちの行うしるしと不思議な業は瞬く間に評判になり、エルサレム付近の町からも、群衆が病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れて集まって来た。病気や悪霊に苦しむ人々は一人残らず癒された。

エルサレム教会は言葉と行いにおいて、復活の主イエスが生きて働くガリラヤの春の再来を証したのである。彼らの宣教はユダヤ地方を揺るがし、人々の憧れと尊敬的になっていった。民衆から篤い支持と賛同を得ていたのである。